

文学分野

「翻訳」の諸相

(TRANS)

メンバー

- 若島 正 (京都大学大学院文学研究科教授・リーダー)
中村紘一 (京都大学大学院文学研究科教授)
宮内 弘 (京都大学大学院文学研究科教授)
佐々木徹 (京都大学大学院文学研究科助教授)
家入葉子 (京都大学大学院文学研究科助教授)
廣田篤彦 (京都大学大学院文学研究科助教授)
杉本淑彦 (京都大学大学院文学研究科教授)
吉田 城 (京都大学大学院文学研究科教授)
永盛克也 (京都大学大学院文学研究科助教授)
三浦笙子 (東京海洋大学教授)
中田晶子 (南山短期大学教授)
鈴木 聡 (東京外国語大学助教授)
吉川幹子 (明治学院大学非常勤講師)
芦本 滋 (高槻高校教諭)
早川文敏 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
北村直子 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
林田 愛 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
小黒昌文 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
津森圭一 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
山田えりか (京都大学大学院文学研究科博士課程研究指導認定)
伊村大樹 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
国房美音 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
小島基洋 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
皆尾麻弥 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
塩谷直史 (京都大学大学院文学研究科博士課程)
合田典世 (京都大学大学院文学研究科博士課程)

河井純子 (京都大学大学院文学研究科COE研究員・研究会補佐員)

研究会の趣旨

言語を伝達の媒体とするとき、「異」を自らのものとするために、必ず「翻訳」という作業が現れる。このようにして生み出される産物は、翻訳に用いられた原典がもっていた地位を超え、移植された文化圏において大きな影響を与えるに至ることすらありうる。それはなぜか。どのような文脈におかれたとき、「翻訳」は新しい意義を賦与されるのか。さらに、「翻訳」に用いられた「原典」資料はどのような姿をとっていたのか。文化圏間で文献の移植が起きるとき、文字はどのように処理されるのか。本研究会では、以上のような問題意識に基づいて、異なる文化圏間で言語移植された文献としての「翻訳」を広い視野と多様な角度から究明することを主たる研究目的とする。さらに、「原典」のさまざまなヴァージョンとしての草稿や、写本などをめぐる問題も取り上げる他、高度情報化時代において急速に言語情報のデジタル化が進行しつつある現在、原資料そのものをどう扱うかという技術の問題や、新しい文献の姿としての電子テキストをめぐる問題も研究の射程範囲としたい。

具体的な研究活動としては、本研究会を大きく2つに分ける。第一研究班は、「ナポコフ訳・注の『オネーギン』をめぐる」を研究テーマとし、上記のような諸問題が交差する場としての具体的な翻訳文献を集中的に研究・討議する。第二研究班は、「異文化体験とフランスの作家・芸術家」を研究テーマとし、異文化接触という視点に立った広義の翻訳の問題を包括的に研究・討議する。

活動状況

第1回の全体会議を2002年11月14日に開き、この研究会全体の運営についての方針を議論した際、具体的な活動は2つの個別研究班を中心にして進めることが確認された。そのうち、第一研究班は、すでに3回の研究会を開催済みで、隔月に一度という定期的な活動が軌道に乗ってい

る。第二研究班は、研究テーマの設定に時間がかかったが、この7月くらいよいよ活動が開始される。

ニューズレター「TRANS」はこれまでに2号を発行し、7月には第3号が出る予定である。

また、2003年3月14日にはポール・クローデル令嬢 Madame Renée Nantet と令孫 Madame Violaine Bonzon を迎え、本研究会の特別懇話会を催した。この報告はニューズレターの第2号に掲載されている。

以下、第一研究班のこれまでの活動状況とその報告をまとめる。

【第一研究班】

[研究テーマ]

「ナボコフ訳・注の『オネーギン』をめぐる」

[研究の方法と目標]

翻訳をめぐる諸問題が集中的に現れており、その独特の翻訳観からつねに議論を呼び起こしてきた、ウラジーミル・ナボコフによる翻訳・注釈の『オネーギン』を集中的に輪読しながら討議する。使用するテキストはAlexandr Pushkin. *Eugene Onegin*. Translated from Russian with a Commentary, by Vladimir Nabokov. Princeton University Press. 1975.

また、このテキストのみならず、そこから派生する、翻訳をめぐる諸問題を射程に入れるために、関連文献も毎回読む。

視野に入れる諸問題は、(1) 翻訳の本質論 (2) ナボコフ訳『オネーギン』の一般的評価、ジョンソン訳等との比較 (3) ナボコフの小説との関連 (4) 『オネーギン』研究 (5) エドモンド・ウィルソンとの論争をめぐる、などである。

成果の公表としては、各年度ごとに詳細な報告集をまとめることを目標にしている。

[研究会報告]

詳細な報告は年度末にまとめられる報告書に譲り、ここでは簡単な要約にとどめる。

第1回研究会

日 時：2003年1月11日(土)午後1時～5時

場 所：文学部新館 若島研究室

参加者：7名

第一研究班の活動のあり方について議論し、2003年度のおよその日程を決めた。

第2回研究会

日 時：2003年3月22日(土)午後1時～5時

場 所：京大会館 213号室

参加者：8名

いよいよテキストを実際に読む作業が始まり、報告の後、活発な討論が行われた。

「テキスト輪読：第1歌第4連まで」

報告者 若島 正 (京都大学)

ナボコフによる『オネーギン』に対する注釈に見られる顕著な傾向は、プーシキンのこの作品をロシア文学の伝統の中に位置づけるよりも、むしろ西欧文学の伝統の中に位置づけようとする方向性である。

そうした方向性は、なにもこの『オネーギン』に付けた注釈に限ったことではない。ナボコフが『オネーギン』翻訳・注釈に先がけて行った、レールモントフの『現代の英雄』を英訳する仕事(1958)においても、そのまえがきでナボコフは「ペチョーリンの人物像は我々の世代のあらゆる悪徳から成り立っている」というレールモントフ自身の言葉をまともに受け取るなど述べ、このペチョーリン像はゲーテのヴェルテルやシャトーブリアンのルネ、コンスタンのアドルフなどを経て、プーシキンのオネーギンへと至る、18世紀後半から19世紀初頭にかけての主に西欧文学における、退屈をもてあました主人公の系譜に属するものだと言及していた。

このことは、ナボコフ自身の文学的な出自をも明らかにする。ナボコ

フが依って立つのは、ロシア文学の伝統ではなく、むしろロシア文学をその内に包含するような西欧文学の伝統である。それゆえに、ナボコフがとらえるプーシキン像は、そうした視座から眺められている。

『オネーギン』の成立については、翻訳に関わる興味深い問題が存在する。よく知られているように、プーシキンの『オネーギン』にはバイロンの『チャイルド・ハロルドの遍歴』および『ドン・ジュアン』の影響が強い。しかし、プーシキンはそうしたバイロンの著作を英語のオリジナルで読んだのではなく、当時流布していたピショーやド・サールの仏訳で読んだ。ナボコフが論じるところによれば、プーシキンはほとんど英語ができなかった（これは後に、ナボコフがエドモンド・ウィルソンとの論争において議論を戦わせることになった問題点のひとつである）。しかも、ナボコフに言わせれば、ピショーによる仏訳はバイロンを希釈したものでしかなかった。それにもかかわらず、「プーシキンの詩人としての天賦の才は、バイロン卿に化けたピショーの中に、ピショーの凡庸な表現やパラフレーズを通して、ピショーの裏声ではなくバイロンの肉声をどういうわけか聞き取った」（p.33）のだとナボコフは言う。ここは、いかにもナボコフらしい直観から出た発言であり、たとえばプーシキンの貧しい英語力を証明しようとするくだり（pp.156-163）に見られるように、本書は綿密な史料調査に裏付けられた実証主義が基本になっているが、その一方で、このように対象を熟知するがゆえに直観のひらめきを発揮する瞬間も多いことをここで記しておきたい。

注釈の細部について述べ出すときりがないので、それは報告書を作成するときに譲って、ここでは一点だけ。『オネーギン』には題辞として、フランス語によるある私信からの（おそらくはプーシキンがこしらえた、架空の）引用が掲げられている。その題辞は、“Pétri de vanité …”（=“Full of vanity …”）というフレーズで始まっているが、本来は「捏ねる、揉む」といった意味のpétrirをこういった比喩的意味で用いた例は、プーシキンがモデルにした17世紀から18世紀にかけてのフランス文学に見られるものであることを指摘してから、ナボコフはこう書く。「ロシア文学において（プーシキンから半世紀後に）次のpétriが現れるのは、文字どおりの意味で、アンナ・カレーニンの予兆的な夢の中に出てくる忌まわしい小男がつぶやく、有名なフランス語の文句の中である」

ナボコフはそれだけしか書いていないが、これはナボコフ愛読者ならすぐになんのことかわかる。『ロシア文学講義』の中で、ナボコフが『アンナ・カレニナ』(ただし、ナボコフに言わせれば『アンナ・カレニン』)を論じて詳しく分析した点のひとつに、アンナとウロンスキーが共通して見る悪夢があった。アンナの鉄道自殺の予兆となるこの悪夢に出てくる小男は、フランス語で“ Il faut le battre, le fer, le broyer, le pétrir.... ” とつぶやいていたのだ。これが他のトルストイ愛読者にとっても有名な文句なのかどうか、大いに疑わしいのではなからうか。これは、二重の悪夢の場面に注目するナボコフにとって、けっして忘れられない言葉なのである。

「文献解題：Priscilla Meyer, “*Lolita and Onegin*”」

報告者 中田晶子 (南山短期大学)

この論は*Find What the Sailor Has Hidden* (Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988) の序章であり、螺旋状に展開するこの本の「定立」を成している。異色のナボコフ研究書という印象のこの本の中でもひときわ独創性を発揮しているのがこの序章であり、『ロリータ』をプーシキンの『オネーギン』のもうひとつの「翻訳」として読み解いている。『オネーギン』の英語への翻訳においてナボコフは可能な限り厳密な「直訳」を試みたが、『ロリータ』では徹底的な「意識」をしたのであり、この小説は、1820年代のロシア文学の記念碑的作品『オネーギン』を1950年代のアメリカ文学の記念碑的作品の中に時空を超えて翻訳した成果であるとす。

この命題の証明のために、プーシキンの『オネーギン』と『ロリータ』の共通点が指摘される。まず、両者が「文化の翻訳」であることが大きな枠組みとしてあげられる。『ロリータ』は「西欧の目を通して見られたアメリカ」であり、ハンバートは現実のアメリカを前にしても、西欧のロマン主義が描いた風景を見てしまう。これは近代ロシア文学の形成期にロシアが直面していた問題と同じものだと指摘される。19世紀初頭のプーシキンは、前世紀における単なる模倣の段階を超えて、西欧の文

学モデルを真にロシアの文化に同化させようと模索し、『オネーギン』において成就させた。ナボコフはその作品をさらに『ロリータ』の中に埋め込んで、ロシアとアメリカの統合としてこの小説を書こうとしたという。

次に、二つの作品を具体的に結ぶものとして、作品の時間、プロット、登場人物の名前、時間や年齢の数字のつながりが明らかにされる。さらにドイツロマン派がボオ経由で密かに『ロリータ』に導入され、クイルティを含めたグループが形成されていることが述べられ、そこから芸術、特に文学の実人生に及ぼす作用、(自己)投影の問題、唯我論の主題が導き出される。主観的想像力のみを頼るために、自己を超越するものを求めても唯我論から抜け出すことができないハンバートは、悪しきロマン主義のパロディとして描かれている。ナボコフにおいても想像力は第一義的に重要であるが、ナボコフとハンバートの差は、芸術的な創造や読解に必要な、対象との批評的な距離が取れるかどうかにあるという。

さらに『オネーギン』が『ロリータ』において変化した部分が論じられる。『オネーギン』では男女主人公がすべてのレベルで成長し、新しい人格の統合を果たしている。それは創作における詩人自身の成長とも重なっている。一方、『ロリータ』では、ロリータの子供時代を奪ったと認識することによりハンバートはある程度の客観性を獲得するが、ロリータは成熟に至らず、女兒を死産して死ぬ。

ヒロインの境遇の変化も対象的である。どちらも田舎町の夢見る少女であったが、タチアナが首都の社交界の花形となるのに対し、ロリータは貧しい労働者の妻となる。この差を生んだものとして、自然と伝統文化の有無があげられる。タチアナはロシアの自然と農村の伝統文化に支えられて成長したが、文化的な伝統のないアメリカの郊外住宅地で大衆文化に囲まれて育ったロリータには成長の糧となるものがない。これがおそらくナボコフが「時代の悲劇」と考えたものであって、新世界アメリカでは、言葉と想像力の世界が墮してしまっている。(この本の「反定立」となる最終章では、『ロリータ』では歪められ本来の力を失ったフォークロアやおとぎ話が、『青白い炎』では日常生活に溶け込む超自然として描かれることが論じられている)。

最後に言語レベルでの統合が論じられる。一般に『オネーギン』において、プーシキンは多様なレベルのロシア語と外国語から近代ロシア文

学の言語を作り出したと言われる。用語においても主題においても高低レベルの境界をなくし、異なる文体を対置させている。領地を歩いて農民の言葉に耳を傾けたプーシキンに倣って、ナボコフはアメリカの女子学生の言葉を採集し、新しい「国民文学」の言語を作り、マスメディアの大衆的な言葉と西欧の教養人の言葉を対置させた。複数の言語レベルの並存するこの作品の中で、『オネーギン』のプーシキンがそうであるように、ナボコフも言語のひとつのレベルにおいてではなく、すべてのレベルを統合する中心部分に見出せると論じられる。

ハンバートの語りにドストエフスキーの「地下生活者」の語りのパロディを聞く、あるいはその少女愛に『悪霊』のスタヴローギンの少女陵辱を重ねる - 『ロリータ』におけるロシア文学の先行テキストとして、普通に思いつくのはこのあたりであろう。ロシアもロシア文学の遺産もこの作品の表面にはほとんど現れていないにもかかわらず、『ロリータ』を『オネーギン』のもうひとつの翻訳として論じたこの論は相当な力業と感じられる。しかも決して奇を衒ったものではなく、ナボコフ世界の中心となる問題を正面から論じており、短いながらも重要な論点をいくつも含んでいると思われる。

討論では、ロシアとアメリカの統合の主題を扱うのであれば、『アーダ』を論じるほうが自然ではないか、という意見が出た。『アーダ』(この本の書かれていない「統合」に相当する)は時間、空間が自由に横・縦断される世界で、異文化が並置され、葛藤がない。ヨーロッパをロシアと統合した『オネーギン』をさらにアメリカと統合する「翻訳」の試みは、やはり『ロリータ』に読みこまなければ意味がないのであろう、という結論になった。

第3回研究会

日 時：2003年 5月10日(土) 午後1時～5時

場 所：京大会館 213号室

参加者：5名

参加者は少なめだったが、この研究会では大きなテーマのひとつとなる、『オネーギン』の翻訳をめぐるナボコフとエドモンド・ウィルソンの論争に関わる一次文献を読むことができた。

「テキスト輪読：第1歌第5連から第20連まで」

報告者 皆尾麻弥（京都大学大学院博士課程）

今回議論の対象とした部分で最初に興味を引くのは、5連7行目にナボコフがつけた注である。この行ではオネーギンに対してpedantという言葉が使われているのだが、この一語の定義をめぐるほぼ3頁にも及ぶ注が展開される。この中でナボコフはモンテニユが使ったイタリア語のun pedanteを初めとして、フランス語、英語による様々な文献を紹介しながらpedantにも幾つかのタイプ（あるいは定義）があるということを示していく。しかしこの注の見事さは初めの一文に込められていると言ってよいであろう。ナボコフはまず初めに、pedantの一種を「自らの見解を、大変な周到さと細部の正確な描写と共に詳述し、唱道するとまではいなくても、吹聴したがる者」と定義するのだが、これはまさにこの注の中でpedantについて得意げに熱弁をふるうナボコフ自身を暗示しているようだから滑稽かつ巧妙なのである。この注に限らず、全編を通してナボコフは一種のpedantぶりを発揮していると言えるであろう。ちなみに、ナボコフは英語版『断頭台への招待』につけた序文の中で、翻訳（者）について「ペダント万歳（Vive le pédant!）、「精神」が伝えられたらすべてよしと思っているまぬけはくたばってしまえ」と述べている。

次に興味深かったのは、11連11行目に出てくる「突然」という意味のロシア語の副詞に関する注である。それによると、この語は短いために（vdrugという一音節）英語のsuddenlyなどよりもずっと頻繁に使われ、同様のことがuzhe（=already）にも言える、という。ナボコフのロシア語小説の英訳を読んだ時にあまりに多くの「突然」や「既に」が出てきて、不自然にさえ感じられることがあるのだが、この注を読んで初めてその理由が分かり、私としては大いに納得した。彼のロシア語小説の英訳において、これらの副詞は当然忠実に、大切に残されるので、その頻出度の高さは英語の文脈に置かれた時、一種の修辞であるかのような錯覚を起こさせるのだ。

さて、当時のプーシキン（そしてその主人公オネーギン）らは、フランス語の作品はもちろんのこと、英語の作品も、また彼自身が多くの詩

の中で賛美しているローマ詩人オヴィジウスの作品も(果ては孔子に至るまで)、フランス語で読んでいるのだが、それに関連して12連9~10行の注を見たい。この中でナボコフは、『オネーギン』にフランスの小説が出てくる度にわざわざそのロシア語訳に言及するロシア人注釈者N. プロツキーを批判の対象にしている。ナボコフによれば、「グロテスクで野蛮で、恐ろしく誇張的なロシア語版を読んでいたのは下層階級の者だけ」である。ここでは、「下層階級」、そしてプロツキーに代表される「ロシア人注釈者」に対するナボコフの優越感さえ感じられるし、少なくともナボコフが「ロシア人注釈者」たちの系統とは一線を画しているということは、ここ以外の場所でも強調されているように思われる。

ナボコフは時に、語源、または語の変遷についても愉快そうに論じ始めるのだが、そのよい例が、オネーギンの羽織っているビーバー毛皮襟つき外套(少年ナボコフも冬のペテルブルクで愛用していたのを思い出す)に関する注である。ナボコフはこの外套shinel'(露)を英語のcarrickで表す。そこでなんと嬉しそうにこの語がもともとフランス系の名前Garric からGarrick(英) karrick(仏) carrick(英)と、英仏を往復しながらやがてこの形に落ち着いた経緯をたどってみせる。一方それとは別に、ロシア語のshinel'はフランス語の「すべすべした絹織物」を表すchenilleに由来するという説も紹介している。Chenilleといえば普通、毛虫とか芋虫を思い浮かべる。鱗翅目専門家ゆえに蝶の幼虫を豊富に作品の中に這わせているナボコフは、一見冷静に、さり気なくこの言葉を出しているように見えるが、読者としてはどうしても、ここで毛虫がでてきたことをひそかに大喜びしている注釈者を想像せずにはいられない(さらに、chenilleに相当すると思われる英語caterpillarを辞書で引くと、これは「毛深い猫」という意味の古期フランス語から来ているという事実に至り、読者の好奇心は尽きない)。このように、ビーバー襟の注釈という名目でナボコフはshinel'という一語を様々な方向へ広げてゆき、それによって露語、仏語、英語の興味深い関係に目を向けさせているようである。

最後に、注釈で説明しているテーマ(あるいは形式)をナボコフが自分の作品の中でも使っている例を挙げる。17連9行の注は、劇場に到着するオネーギンに関するものだが、ナボコフは作者プーシキンの方がオネーギンを追い越し、3連分先に劇場に居るということに注目して、そ

れを「追跡のテーマ」と呼ぶ。この追跡のテーマが顕著に現れているのがナボコフの作品『賜物』であるが、これに限らずプーシキンとオネーギンのように、作者と作者によって作られた人物が同平面上で追いつ追われつするという形式は、ナボコフが好んで用いているものだと言える。

「文献解題：“The Strange Case of Pushkin and Nabokov” (*A Window on Russia*) and “Reply to my Critics” (*Strong Opinions*)」

報告者 吉川幹子（明治学院大学非常勤講師）

今回取り上げたのは、ナボコフの『オネーギン』訳・註をめぐる、いわゆるナボコフ・ウィルソン論争の中心となる二つのテキストである。

ナボコフの『オネーギン』は、ポーリングン叢書から出ることが決まってからもなかなか出版に至らず、自らの発見が先取りされまいかと焦りを感じていたところ、Walter Arndtによるオネーギン訳が出版され、皮肉にもポーリングン賞を受賞する。ナボコフは*New York Review of Books*にてArndtの翻訳を酷評する記事（April 30, 1964）を書くが、その後ナボコフの『オネーギン』が世に出ると、今度はウィルソンがArndtの翻訳との比較も交えながら詳細に渡る批判を同誌に書く（July 15, 1965）。ナボコフは「ウィルソン氏がロシア語の専門家であると勘違いしかねない読者を真実に導くため」に暫定的な返答を書き、そこでウィルソンの比較的単純な誤りを7点ほど指摘、ウィルソンはそのうち2点を認める（August 26, 1965）。そして翌年の2月、*Encounter*に前回の指摘も含めたナボコフによる返答の完全版が掲載される。

ウィルソンの批判はナボコフの文体から原文の読みに至るまで幅広く、具体的な指摘がほとんどであるが、目に付いたところは片端から挙げていったのではないかと思えるほど細かい部分にまで言及されている。それに対するナボコフの回答は自信たっぷり、ウィルソンをからかうような余裕さえ見られる。

ウィルソンはまずナボコフの翻訳における単語の選び方や文体を批判するが、中でも廃語などの使用については十以上の例を挙げ、それらが

すべてOEDにおいて“dialect” “archaic” “obsolete”のいずれかであることや、比較的大きな辞書にしか載っていないことを指摘し、ナボコフの言葉の選出がいかに不適切であるかを説いている。これに対してナボコフは、作家が言葉を蘇らせようとして使えばその言葉は再び命を得て息をし始めるのだとし、自分が古風な語句を使うのは、古風に表現された原文に合わせるためであり、また通常のロシア語では生きているが英語では失われてしまったニュアンスを蘇らせるためであると説明している。さらに、まるで辞書が言葉の有効性を決定しているかのようなウィルソンの考えに対しては、痛烈な批判をあびせている。

ナボコフはウィルソンのほぼすべての指摘に対して何らかの答えを返しているような印象を与えるが、ではウィルソンの疑問がすべて解決したかということ、そうでもないようである。例えば、automatonsはatomataにすべきであるといった細かい指摘に対してまで丁寧に返答している一方で、ウィルソンが数ページを割いて疑問をぶつけている、動詞*pochuya* (臭いをかぐ) をsenseと訳していることに関しては、別の問題でその箇所に触れてはいるものの、結局答えていない。また、ウィルソンがロシアニズムであるとして指摘した、“to listen the sound of the sea”に対してはこれはロシア語的な癖が出たわけではなく、詩的表現、古語に見られるlistenの他動詞的用法であるとして、テニソンやバイロンの例を添えているが、ロシア語の原文を参照すると実は極めて一般的な文体であった、というような例があることもわかった。

ウィルソンは大胆にもナボコフの「解釈」を批判してもいる。オネーギンの後半の行動が不自然であるというナボコフの註に対して、ナボコフはオネーギンに対して誤った幻想を抱いている、彼は元来卑劣な性質の持ち主であり決闘において汚い手段に出たのも十分予測しうるのではないかと返している。一方ナボコフは、こうした「解釈」というもの自体を否定し、次のように説明している。書かれてもないオネーギンの性格についてあれこれ推測するなど見当違いであり、一方自分の判断は純粋に事実のみから引き出されたものである。また、決闘において「汚い手段」などは取りようもなく、「汚い手段」に出ている者がいるとすればそれは、より魅力的な人物のほうを生かすという伝統的手法に賢くも従った作者プーシキンに他ならない。

以上のような、言葉に対する考え方や作品を常に作者の視点から眺め

ようとする立場は、ナボコフの小説にも一貫して通じる部分があり興味深い。小説のとらえ方におけるウィルソンとの根本的な違いもそのあたりに見られるようである。

エッセー

芥川龍之介旧蔵書にみるフランス文学の痕跡

吉田 城

日本と外国文化の接触と交流の歴史をたどることは、きたるべき真の国際化時代における精神文化の自己同一性を考えるうえで、大きな示唆を与えてくれる。ここでは筆者が数年前に着手し、調査を続けている芥川龍之介（1892-1925）における外国文学の受容と解釈の問題について、ごく簡単な報告をさせていただく（注）。

芥川龍之介の文学世界は非常に広大かつ深く、その全体像はさまざまなアプローチによる研究の結果、しだいに明らかになってきた。最近出版された『芥川龍之介大事典』『芥川龍之介作品事典』（勉誠社）の2冊、また『芥川龍之介作品論集成』叢書（翰林書房）などは現在わが国における芥川研究の到達点を示すものと言えるだろう。芥川研究においては、評伝や証言の調査、作者の思想や伝記事実の探求、テーマの解釈や影響関係や文体を論じる作品論とならんで、作品のよってきたる材源の調査が大きな位置を占めているが、それはしばしば「ブッキッシュな」と評される芥川の膨大な読書量と博識を考慮すれば当然のことであろう。

富田仁氏の編集した芥川の「比較文学研究」（朝日出版社、1972）は、広い視野でアングロ＝サクソン、フランス、ドイツ、ロシアなど西洋文学と芥川の関連を論じた代表的な書物である。それ以降もこの分野では興味深い研究が積み重ねられている。芥川におけるフランス文学の寄与は非常に大きく、彼が言及した外国ものでもっとも頻度数が高い。けれども彼は一高から東大時代にかけてもっぱら英語を学び、ドイツ語も選択したものの、フランス語を系統的に学習したという形跡はない。書

簡の中でもフランス語は後回しにしたと述べている。したがって芥川はフランス語には自信がなく、フランス作品は多く英語訳で読破していた(学生時代に発表したアナートル・フランスの翻訳も英語からの重訳であった)。

1913年の浅野宛書簡では、「早いものにて初めてロータスシリーズという紫色の本にてDAUDETのSAPHOを読みしより四年たち候 四年たてど英語も独逸語も呉下の旧阿蒙にていやになり候 和文はよめず漢籍はわからず外国語はそら覚えでは何の役にもたちそうにもなくもう少しどうかした頭に生まれ返ってこなければ駄目と思ひ候」などと、かなり卑下しつつ書いている。とはいえ、芥川の有名な警句の一つに「人生は一行のポオドレエルにもしかない」(『或阿呆の一生』)というのがある。フランス文学に寄せる芥川の思いが感じられる言葉ではないか。

芥川龍之介の草稿や資料群は、芥川比呂志や甥の葛巻義敏の寄贈によって、日本近代文学館、山梨近代文学館、藤沢市図書館に保管されている。そのうち日本近代文学館には芥川旧蔵書が散逸を免れて収蔵されていて、そのカタログ(絶版)も刊行されている。旧蔵書の洋書は全部で638点、318名の著者にわたり、総計809冊におよぶ(ちなみに和漢書は465点1822冊)。809冊のうち、芥川自身によると思われる書き込み(感想、メモ、アンダーライン、丸印など)が345冊に残っている。

芥川は日本橋の丸善書店などで英訳フランス文学図書を購入していた。ラプレー、デカルト、パスカル、モンテーニュ、ラシーヌから象徴派、ロティ、アナートル・フランスなど同時代文学にいたるまで広く買い集めている。特徴的なのは、短篇・中編小説への関心が高かったことである。これらの蔵書に残された書き込みや各種の符号を調査することにより、芥川の読書の一端が分かってくる。

ほんの一例をあげよう。フローベールの『聖アントワーヌの誘惑』(ラフカディオ・ハーンによる英訳)について、芥川は「仏蘭西文学と僕」(「中央文学」1921年)のなかで、高等学校時代に読んだと言っているが、この英訳本には読了を示すメモ“April 1st 1920, Tabata”が巻末にあり、おまけに自筆で「コノ本ヲ読ンデ退屈セザルモノハ大賢力大愚ナラン」と皮肉めいたことを記している。芥川がこれより面白かったと述べている同じフローベールの『サランボー』はどうかというと、青鉛筆で数箇所下線を引いている。それは意外にも筋書きに関する部分で

はなく、ヒロインの服装の細密描写、異国的な町のスケッチなどであり、作家がこうした描写を参考にしようとしていたことをうかがわせる。今後、この調査を続行することで、これまで知られていなかった一面を明らかにしていきたい。

(注)筆者の芥川研究は、最初岩波書店芥川全集の編集に協力する形で、欧文自筆メモ類の調査をおこなったことが直接のきっかけである。論考としてはおもに生成論の立場から草稿などを調査した「盗人の誕生」(羅生門論、日本語およびフランス語、1999)、「ある文明開化のまなざし」(「舞踏会」論)、「雛」の分析(フランス語、2000)、日本の武士道と新渡戸稲造にかかわる「手巾」の分析(フランス語、2001)、母親の主題に関する比較研究(パリ第8大学での講演)などである。

エドモンド・ウィルソンを「翻訳」する

中村 紘一

先だってあるパーティの席で、イラク戦争のことが話題になった。西洋古典の中務さんはちょっと得意げに「ギリシアははっきりイラク侵攻に反対しています」とおっしゃる。そう言えば、フランスもドイツもロシアも反対である。その分、安保理を無視して戦争を始めた米・英は旗色が悪い(ついでに言えば、その尻馬に乗った日本もである。)英文の宮内さんは「当分の間、肩身の狭いことですよ。それにBAの飛行機はテロが恐くて乗れませんし」と嘆く。

英国にはブレア首相に楯突いて辞めた大臣がいた。ブッシュ政権でもパウエル長官などは必ずしも好戦的でなさそうだが今のところ辞めるような気配はない。アメリカ国民の7割は今度の戦争に賛成なのだそうだ。そんな状況で、わたしは残りの3割の人々の心情を察したくなる。ニューヨークの反戦デモに参加しても、ブッシュのような人物を大統領に頂く彼らの苦悩は、ヨーロッパ諸国民のそれに較べてはるかに大きく複雑なのではないか? それはフセイン独裁下にあるイラク人の苦悩にも通じる。「グローバリゼーション」などという曖昧な言葉に惑わされ人間

の進歩を信じて、21世紀には二度と戦争のようなバカな真似をすまいと錯覚していたわたしなどには、2人の大統領はあらためて現実に目覚めさせてくれたありがたい(?)存在ではあるが、しかし、それだけに大統領としては最低である。(そこで、もしフセインがブッシュも大統領を辞めるなら自分も辞めるという条件を出して、ブッシュがそれに応じていたなら、一滴の血も流さずに済んだはずで、そうすれば2人は立派な大統領として歴史上名誉ある地位を留めることになったのではないか、などと半分真面目に考えたくなる。)

アメリカの批評家エドモンド・ウィルソン(1895-1972)が、もし生きていたなら、残りの3割のアメリカ国民であったのは間違いない。彼は『愛国の血糊』(1962)と題する南北戦争の文学研究の大著に序文をつけて、その中で「自分の戦争観を形作っている一般の視点をあらかじめ読者に説明しておく義務がある」と述べ、「わたし自身2つの戦争を生きてかなりの歴史を読んできたから、もはや国家が行う《戦争目的》の声明を真面目に受け止める気にはなれない」と言っているのだ。1946年生まれの子は、困ったことに、大統領になるには若すぎたのだ。あるいは、歴史を読んでこなかったのだ。だから、本気で(?)「戦争目的」の声明を読み上げたりする。

ところが、ウィルソンによれば、その声明は「われわれが戦争をしたり、どこかの国を攻撃する時には、いつも必ず誰かを解放するためであるということになっているのである。」しかし、戦争とは、実は、原始生物のクロナマコが自分より小さい個体を呑み込むのと同じで本能によって引き起こされるもので、ただ人間は「美德」とか「文明」とかという言葉でそれを正当化しようとするだけである。だから、「われわれは……《圧制者》や《犯罪者》から犠牲者を保護し解放するのだとか、《正義》と《悪》といったわが国の古いお題目を、有罪者を罰するのだといった口調で語るのをやめるべきだ」という。

60歳になった時、ウィルソンは次のようにも述懐している。「他人を殺傷したり逆に自分がそうされたりもせず、恐ろしいこの2つの大戦を切り抜けられたことを、そして、どちらの戦争でも、信じてもない大義名分のために深刻な犠牲を払うことなく生き延びて自分が信じるものに、つまり、文学に専念できたことを一瞬たりとも悔いたことはない」(『わが心の断片』1956。)

遠い異国で砂嵐に曝されながらイラク人に銃を向けるアメリカ海兵隊員には、ヘリコプターから白い愛犬を抱えた夫人とともに緑の芝生に降りてきて手を振るブッシュ大統領が口にする「大義名分」がどれほど信じられたのだろうか？

アメリカという国に絶望しかねない時に、ウィルソンを思い出して気を取り直す。加えて、わたしが何より感心するのはウィルソンが単に戦争の「信じてもない大義名分」を云々するだけでなく、「信じている文学に専念」したことである。そして、その文学は英米文学だけでなく、広くヨーロッパ、ロシア文学にも及び、しかも、それはいわゆる純文学だけでなく、南北戦争戦記、マルクス・レーニンの伝記、死海文書などのノン・フィクションまでも含んでいる。そのために、彼はロシア語を独学し、ヘブライ語に挑戦したのだ。ヘンリー・ジェムズを論じて、「(ジェムズの)作品が日本の読者のために翻訳されることは間違いない。あの国はすでに戦前にポール・ヴァレリーとブルーストの洗練された文学に魅せられていたくらいなのだから」と早くも1948年の時点で書いていたりするとすっかりうれしくなってくる。

そして、そんな彼の作品を翻訳紹介することは、「グローバル化」や「翻訳の諸相」といったプロジェクトの趣旨からもそれほど大きく外れまいと信じている。

現代英詩人の草稿・文体研究

宮内 弘

私は、本プロジェクト「翻訳の諸相」の研究の一環としてイエイツ (W. B. Yeats)、ラーキン (Philip Larkin) を中心とする現代英詩人の草稿及び、文体研究を行っているが、ここではこの研究の一端を簡単に報告しておきたい。

私は永年英詩の文体研究に携わってきた。特にここ数年はラーキンの研究をするために、彼がかつて図書館長をしていたハル大学の図書館を訪れ、彼の死後開設されたラーキン資料室に保管されている草稿 (workbooks) をはじめ貴重な資料を閲覧させてもらっている。彼は推

敲を何度も重ねるタイプの詩人で、彼が書き直した箇所を詳細に調べていくことによって、彼の文体的特徴に迫っていくことができるように思われる。またラーキンに多大の影響を与えたイェイツも多くの草稿を残しているので、二人の草稿を文体論的観点から比較しながらそれぞれの文体の特質を明らかにしようと試みている。

この草稿研究の過程で二人の詩人が韻に対して並々ならぬ精力を注ぎ込んでいることが明らかになった。例えばイェイツは、いくつかの詩において、まず最初に押韻する語を配列して韻のパターンを決めてから詩を書き始めている。また二人とも無韻詩はあまり書いていないし、押韻の仕方や押韻する語の選択に際しても細心の注意を払い、独自の工夫を施しているのである。いうまでもなく韻は詩において最も重要な形態的要素の一つであるが、文体の観点からこれまで十分に研究がなされてきたとは言い難い。そこで私は最近、これら二人の詩人の現存する草稿などを参照しながら、韻の問題に焦点を合わせて彼らの作品の文体を研究している。

韻の問題に関して、その典型的な例をラーキンの作品から示そう。彼には「鉄条網」(“Wires”)と題する1連が4行からなる全2連8行の短い詩がある。この詩において、ちょうど17世紀にハーバート(George Herbert)が羽根や祭壇の形をした詩(これは“pattern poems”とか“emblem poems”と呼ばれる)を書いて、詩の内容を形式で表そうとしたように、20世紀における技巧派の代表であるラーキンは韻によって間接的に詩のテーマや内容を示唆あるいは表現しようとしたのである。もう少し具体的に見てみよう。

第一連には押韻は見られない(abcd)。ところが第二連を読み終えると第一連の押韻パターンを逆にひっくり返したものが浮かび上がってくる(dcba)。第一連では若い雄鹿が清らかな水を求めて牧場を自由にさまよう。ところが第二連にはいると、鹿は牧場の境界を越えようとして電気が通っている鉄条網にふれ、電気ショックを受ける。この経験に懲りて鹿はその日以来、境界内にとどまり飼い慣らされていくのである。ふつう押韻は連ごとに完結するものであるが、この詩では連を越えて第二連で完結するようになっている。第一連では若鹿はまだ鉄条網の存在を知らず、自由奔放に牧場内を歩き回っているため、それに対応して足かせの機能を持つ韻がないのである。ところが第二連にはいるとこれと

対照的に、電気ショックを受けて、自由を制限する鉄条網の存在に気づく。これに呼応するかのように押韻パターンが出現するのである。しかも、ちょうど鉄条網が牧場を取り囲んでいるように、この押韻はabcd-dcbaと円環状になって最後に閉じる形になっている。

別のラーキンの詩では主人公の変化のない惨めな日常生活が描かれているが、その際abab, cdcd, efef,...というような単調な押韻パターンが用いられて、間接的に詩のテーマが示唆される。

ところで韻には完全韻と不完全韻とがあるが、ラーキンは（一部にはイエイツも）これらをうまく使い分けることによって作者の微妙な感情の動きを巧みに表現している。例えば、恋人同士の不信感や感情のギャップ、嘘の陳述、不釣り合いな関係などを表す場合には不完全韻を、それとは対照的に話者の真情や作者の共感、真理や事実などを表す場合には完全韻を、それぞれ使用して独特の効果を上げている。

このようにラーキンは詩の内容によってさまざまな押韻パターンや不完全韻、完全韻を駆使することによって、詩の意味やテーマの一部を暗示し、独自の韻の文体を生みだしているのである。

同様にイエイツに関しても韻と作品の関係をいろいろ調べているが、これに加えてどのような単語が押韻に使われるかを前期、中期、後期に分けて探っていくことによって、押韻の変遷を調べていきたい。これまでの調査によれば、前期はありきたりの韻が多いが、後期になると不完全韻や意外性を伴う韻が多くなるようである。

最後に非常に制約の多い詩形であるソネット（14行詩）の韻の問題に移ろう。ソネットにはイギリス型、イタリア型に属する基本的な押韻パターンとそのvariationがあるが、私はその中で特に基本からはずれた押韻パターンに注目し、それがソネットの文学的意味とどのように関わっているかをこれまでイエイツ、ラーキンの作品に具体的に即しながら分析、検討してきたが、今後考察の対象をさらにヒーニー（Seamus Heaney）の作品にまで拡大してこの問題を究明していきたいと考えている。

今後の活動

第一研究班と第二研究班の当面の活動日程は次のとおりである。また、秋には、第二研究班で海外の研究者を招聘して研究会を催すことが予定されている。

第一研究班 第4回研究会

日 時：2003年7月21日（月・祝） 午後1時より

場 所：京大会館 103号室

報 告：

- (1) 鈴木 聡（東京外国語大学）
「オボコフ訳・注『オネーギン』第1歌第21連から第33連まで」
- (2) 芦本 滋（高槻高校）
「文献解題：Douglas R. Hofstadter, *Le Ton beau de Marot*」

第二研究班 第1回研究会

日 時：2003年7月22日（火） 午後2時より

場 所：文学部新棟2階 第3演習室

基調報告：

- (1) 杉本淑彦（京都大学）
「工藤庸子著『ヨーロッパ文明批判序説』をめぐって」
- (2) 吉田典子（神戸大学）
「ドラクロワ『アルジェの女たち』におけるジェンダーと政治」

第二研究班 第2回研究会

日 時：2003年9月11日（木） 午前11時より

場 所：文学部新棟8階 フランス文学研究室

講 演：

モンセラート・ロペス・ディアス（サンチャゴ・デ・コンポステラ大学、スペイン）

「広告の言語における非翻訳と固有名の役割」

第一研究班 第5回研究会

日 時：2003年9月13日（土）午後1時より

場 所：京大会館 213号室

報 告：

- (1) 中田晶子（南山短期大学）
「ナボコフ訳・注『オネーギン』第1歌第34連から第48連まで」
- (2) 三浦笙子（東京海洋大学）
「文献解題：Lawrence Venuti (ed.), *The Translation Studies Reader*」

第一研究班 第6回研究会

日 時：2003年11月1日（土）午後1時より

場 所：京大会館 213号室

報 告：

- 吉川幹子（明治学院大学非常勤講師）
「ナボコフ訳・注『オネーギン』第1歌第49連から第60連まで」

2004年1月に京都大学博物館でロラン・バルトの絵画展覧会が開かれるが、それにあわせて第二研究班ではフランスからバルトの専門家を招き、また学内学外の研究者を集めて、次のようにシンポジウムを開催する予定である。

第二研究班 シンポジウム

日 時：2004年1月24日（土）午後1時より

場 所：関西日仏学館 稲畑ホール

第1部 講演 午後1時より2時30分まで

講 演：ルイ＝ジャン・カルヴェ（講演題目未定）

司会・通訳：松島 征

第2部 シンポジウム（日本語） 午後3時より5時30分まで

報 告：松島 征（高等教育開発センター）

篠原資明（人間環境学研究科）

大浦康介（人文科学研究科）

永盛克也（文学研究科）

小林康夫（東京大学）

司会進行：吉田 城（文学研究科）

* 共催 京都大学博物館・文学研究科(21世紀COE)・関西日仏学館
懇親会 カルヴェ先生を囲んで